日 本 独 文 学 会

秋 季 研 究 発 表 会

2023 年 10 月 14 日（土）・10 月 15 日（日）

第 1 日　午後 1 時より
第 2 日　午前 10 時より

会場　京都府立大学 下鴨キャンパス
稲盛記念会館

〒606-0823 京都府京都市左京区下鴨半木町 1-5
E-Mail: tagung2023kyoto@jgg.jp

参加費（事前振込）
会員 1,000 円（当日 1,500 円）
学生会員 500 円（当日 1,000 円）
非会員（含む学生）1,500 円（当日 2,000 円）

※事前振込の方法については、学会 HP のお知らせをご覧ください。

日 本 独 文 学 会
〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6 南大塚エースビル 603
Tel./Fax: 03-5950-1147
E-Mail（メールフォーム）: http://www.jgg.jp/mailform/buero

交通と会場のご案内

研究発表会場：京都府立大学 下鴨キャンパス　稲盛記念会館
〒606-0823 京都府京都市左京区下鴨半木町 1-5

最寄り駅：地下鉄烏丸線「北山」下車　１番出口から南へ徒歩 5 分

懇親会会場：イタリアンレストラン「In the Green」
（案内図参照。発表会会場より徒歩 5 分。
〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町府立植物園北山門横）

Informationen zum Tagungsort

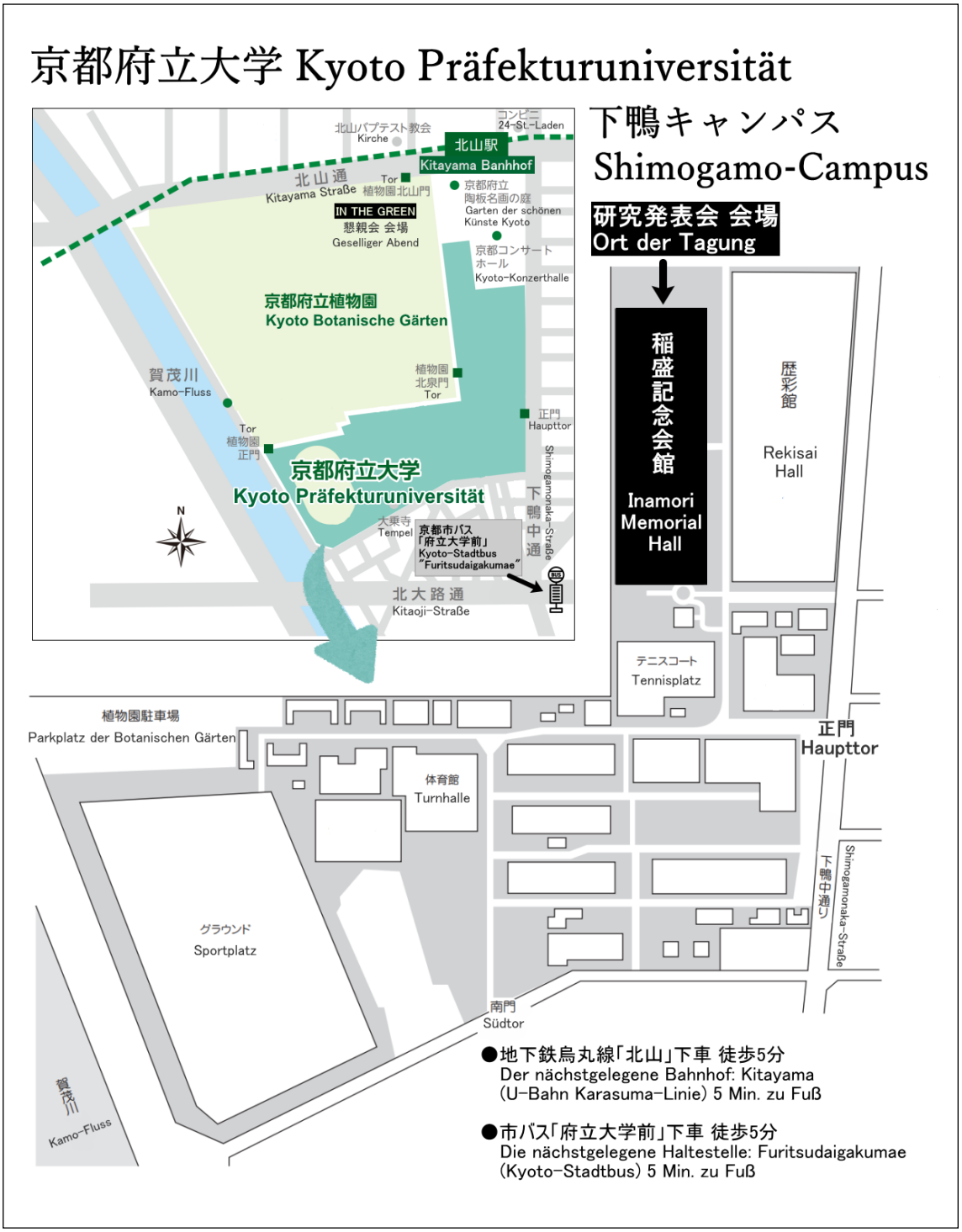
Die Tagung findet auf dem Shimogamo-Campus der Kyoto Präfekturuniversität (in „Inamori Memorial Hall“) statt.
Adresse: 1-5 Shimogamo-Hangi cho, Sakyo-ku, Kyoto 606-0823

Der nächstgelegene Bahnhof:
Kitayama (U-Bahn Karasuma-Linie)

Der gesellige Abend (Party) findet im italienischen Restaurant *In the Green* statt. (Etwa in 5 Minuten zu Fuß vom Tagungsgebäude erreichbar. Siehe den Plan!)

Nähere Informationen unter URL:
https://www.kpu.ac.jp/guidance/campus/shimogamo/

アクセスマップ / **Standort**



京都府立大学 HP より抜粋：https://www.kpu.ac.jp/guidance/campus/shimogamo/
京都三大学教養教育研究・推進機構 HP より抜粋：https://kyoto3univ.jp/p170

懇親会 Geselliger Abend

会場アクセス Zugang zur Veranstaltung

IN THE GREEN

京都市左京区下鴨半木町 府立植物園北山門横

075-706-8740　https://www.inthegreen.jp/

発 表 者 ・ 発 表 会 場 一 覧

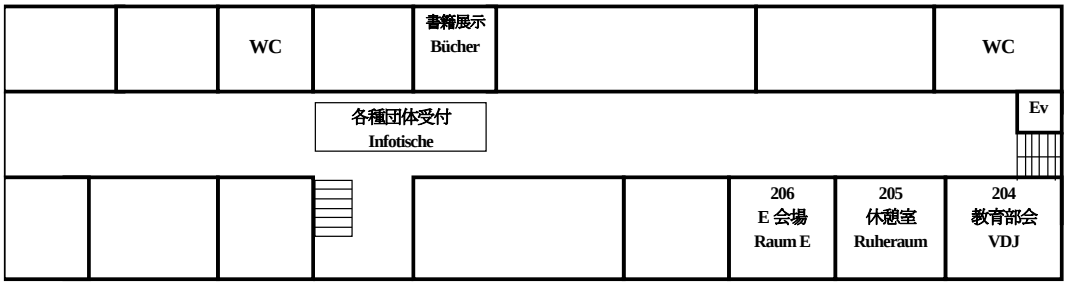
2023年 10月 14日(土) 13:00〜18:00

	A会場 (104教室)	B会場 (103教室)	C会場 (102教室)	D会場 (101教室)	E会場 (206教室)	1F入口ホール	204教室
13:00 〜14:25						(13:00〜14:30) ポスター発表 生駒 美喜	(13:00〜18:00) ドイツ語教育部会 DaF-Café
14:25 〜14:30	開会の挨拶						
	シンポジウム I	シンポジウム II	口頭発表:文学 I	口頭発表:語学	ブース発表 I	ポスターは 引き続き掲示	
14:30 〜15:05	(14:30〜17:30) 「群集」を再訪する ただしパトスなしに	(14:30〜17:30) Die Romantik zwischen Universalpoesie und Gesamtkunstwerk	今村 武	横田 詩織	(14:30〜16:00) 藤縄 康弘		
15:10 〜15:45			馬場 浩平	黒田 享			
15:50 〜16:25			Thomas Schwarz	井坂 ゆかり	ブース発表 II		
16:30 〜17:05			児玉 麻美		(16:15〜17:45) 中川 慎二 渋谷 歩		
17:10 〜17:45			杉山 東洋				

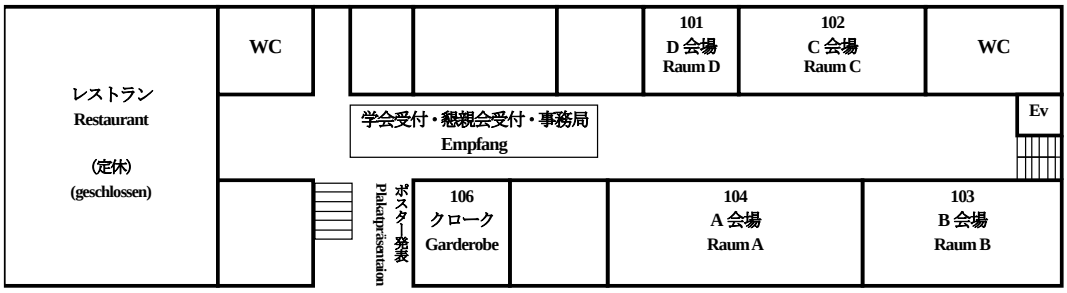
2023年 10月 15日(日) 10:00〜13:10

	A会場 (104教室)	B会場 (103教室)	C会場 (102教室)	D会場 (101教室)	E会場 (206教室)	1F入口ホール	204教室
	シンポジウム III	シンポジウム IV	口頭発表:文学Ⅱ、 文化・社会	口頭発表:独語教育		ポスターは 引き続き掲示	(10:00〜12:00) ドイツ語教育部会 DaF-Café
10:00 〜10:35	(10:00〜13:00) カリスマ教師と その弟子たち	(10:00〜13:00) 中世文学における 婦人の名誉	藤田 隼風	Nina Kanematsu Diana Beier-Taguchi			
10:40 〜11:15			山下 大輔	星井 牧子			
11:20 〜11:55			保坂 直之	山田 真実			
12:00 〜12:35			渡辺 将尚				
13:00 〜13:10	閉会の挨拶						

会場案内図 京都府立大学 稲盛記念会館 Inamori Memorial Hall, Kyoto Präfekturuniversität



２Ｆ



１Ｆ 入口 Eingang

託児室：合同講義棟 3 階第 6 講義室

第 1 日　10 月 14 日（土）

開会の挨拶（14:25～14:30）

A 会場（104 教室）

京都支部長　青地　伯水
会　　長　小黒　康正

※ポスター発表は開会挨拶に先んじて 13:00 に始まります。

シンポジウム I（14:30～17:30）

A 会場（104 教室）

「群集」を再訪する――ただしパトスなしに
両大戦間期ドイツ語圏の文学における群集表象の再検討

司会：海老根　剛

１．同期と拡散の詩学――ヴァイマル共和国時代の都市小説における群集のイメージ　海老根　剛
２．発酵する群れ，発熱するテキスト――A・デーブリーン『山 海 巨人たち』における文学的テルモグラフィー　粂田　文
３．第一次世界大戦と「死者たちの群集」表象――戦友意識と戦死者祭祀　古矢　晋一
４．未解決の問いとしての群集――H・ブロッホの群集思想と小説美学　早川　文人

シンポジウム II（14:30～17:30）

B 会場（103 教室）

Die Romantik zwischen Universalpoesie und Gesamtkunstwerk

Moderator: Kanichiro Omiya

１．Zum Verhältnis von Poesie, Medien und Wissen bei Novalis　Johannes Waßmer
２．Romantische Subjektivität im Werk Justinus Kerners　Takeo Tano
３．Justinus Kerners „Reiseschatten“ als romantisches Gesamtkunstwerk　Arne Klawitter
４．Spiegelung und Blendung. Glasmedien im Werk von E.T.A. Hoffmann　Michael Wetzel

口頭発表：文学 I（14:30～17:45）

C 会場（102 教室）

司会：小林　哲也・菅　利恵

１．啓蒙の合流点としての『ドイツ建築について』　今村　　武

２．幻想としての芸術崇拝――ヴァッケンローダーとティーク『芸術を愛するある修道士の心情の吐露』(1797)におけるラファエロの絵画『システィーナの聖母』崇拝について　馬場　浩平

３．Wider „Ausländerey“ und „Exoteromanie“. Problematisierung und Pathologisierung des Exotismus um 1800　Thomas Schwarz

４．理想の劇場の創出を目指して――グラッベの作品における喜劇的要素について　児玉　麻美

５．シュティフターの政治論における「人間社会」概念とその『晩夏』との関連について　杉山　東洋

口頭発表：語学（14:30～16:25）

D 会場（101 教室）

司会：金子　哲太・大喜　祐太

１．モダリティ表現の解釈についての一考察――AI 翻訳と人間翻訳の比較を通して　横田　詩織

２．接尾辞-ung の分布変化――中世ドイツ語訳ベネティクト戒律に基づいて　黒田　　享

３．相関詞 es の談話上の機能　井坂 ゆかり

ブース発表 I（14:30～16:00）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

E 会場（206 教室）

時制と情報構造：完了時制と過去時制を対象に　藤縄　康弘

ブース発表 II（16:15～17:45）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

E 会場（206 教室）

「赤新語を行く人は死にに行く人」――ドイツ語＝日本語 E-Mail タンデム学習におけるフィードバックの役割　中川　慎二 ・ 渋谷　　歩

ポスター発表（13:00～14:30）
（ポスターは期間中を通じて掲出されています）
１F 入口ホール

ドイツ語心態詞を含む発話における発話意図とアクセントおよび音声特徴とのかかわりについて　生駒　美喜

懇　親　会（18:30～20:30）

会場：イタリアンレストラン「In the Green」
会費：6,000 円（学生・常勤職のない会員は 5,000 円）

※懇親会費は事前振込です。京都支部からのお知らせをご覧ください。

第 2 日　10 月 15 日（日）

シンポジウム III（10:00～13:00）
A 会場（104 教室）

カリスマ教師とその弟子たち
戦間期ドイツにおける人文科学の再生と変容

司会：香田　芳樹
１．三つのモナド論――第二次大戦前夜の個我と国家の問題について　香田　芳樹
２．自由から義務へ――フッサールとハイデガーの間のハンス・ライナー　馬場　智一
３．「そして，もしこの本が成功しているならば，この本はひとつのゲシュタルトであるだろう」――ムージルの思想と作品における現象学的課題としてのゲシュタルト概念　宮下 みなみ
４．ゲシュタルトの誘惑――ゲオルゲ・クライスにおけるドイツ・ユダヤの共生について　稲葉　瑛志

シンポジウム IV（10:00～13:00）

B 会場（103 教室）

中世文学における婦人の名誉

司会：嶋崎　啓

１．中高ドイツ語の êre「名誉」の語義について　嶋崎　啓
２．『パルチヴァール』における「名誉」の諸相　松原　文
３．ミンネザングにおける婦人の名誉――「婦人の歌」を中心に　伊藤　亮平
４．イゾルデの名誉と愛――トリスタンの刀の欠損部分の意味　渡邉　徳明

口頭発表：文学 II，文化・社会（10:00～12:35）

C 会場（102 教室）

司会：児玉　麻美・須藤　秀平

１．フランツ・カフカ『訴訟』と第一次世界大戦　藤田　隼風
２．分裂する人称と精神の危機――フランツ・カフカ『巣穴』　山下　大輔
３．トラークルの『夢の中のセバスティアン』詩集の成立過程に見える「妹の連作」　保坂　直之
４．戦後ドイツにおける「理念の喪失」とホロコースト否定論　渡辺　将尚

口頭発表：ドイツ語教育（10:00～11:55）

D 会場（101 教室）

司会：田原　憲和・吉村　淳一

１．Schulentwicklungsprojekt „Deutschförderung Plus“ – langfristige wissenschaftliche Begleitung einer integrierten Deutschförderung an einer deutschen Auslandsschule　Nina Kanematsu / Diana Beier-Taguchi
２．ドイツ語学習者の発話における「非流暢性」を考える　星井　牧子
３．日本におけるドイツ語学習者の Willingness to Communicate と諸影響要因との関係性の変化　山田　真実

閉会の挨拶（13:00～13:05）

A 会場（104 教室）

今井　敦

研究発表会期間中，上記のプログラムに加えて，書店・出版社等による書籍展示が行われます。

第 1 日　10 月 14 日（土）

シンポジウム I（14:30～17:30）

A 会場（104 教室）

「群集」を再訪する――ただしパトスなしに
両大戦間期ドイツ語圏の文学における群集表象の再検討

司会：海老根　剛

本シンポジウムは，2000 年代以降に人文学諸分野で生じた群集（Masse）という主題の再浮上とそれに伴う 19 世紀末以来の群集をめぐる思考の枠組みの捉え直し，および集団の行動に関する新たな知見の形成を視野に収めつつ，両大戦間のドイツ語圏の文学にみられる群集表象を再検討することを試みる。

政治哲学の分野では，とりわけ 2010 年代以降，「占拠」を主要な形態とする集団的な政治行動や，中心的な指導者や指揮系統を持たずソーシャルメディアを駆使して流動的に展開する抗議活動を背景として，「集会（アセンブリ）」や「蜂起」といった人々の共同行動をめぐる理論が練り上げられてきた（Butler 2015, Hardt & Negri 2017, Unsichtbares Komitee 2014）。またポピュリズムの隆盛を背景として，ル・ボンやフロイトの群集心理学の読み直しも活発化している。

他方，2000 年代以降に急速に発展した群れの振舞いをめぐる科学研究の知見（中枢的・階層的な統御を必要としない自己組織化の能力としての群知能の発見）もまた，人文学における群集や集団の考察に無視し難い影響を及ぼしてきた（Vehlken 2012）。

こうした動向に呼応して，ゲルマニスティクおよび文化研究においても，特に 2000 年代後半以降，群集という主題への注目が再び高まっている（Vogl et al. 2007, Gamper 2007, Lüdemann et al. 2010, Zeller 2011, Wagner et al. 2014, Gumbrecht 2020）。

集団の行動をめぐる上述の二つの新しい思考の潮流は，かつて群集の名のもとで論じられた事象を扱いながらも，主権的主体（思考と行動の能力を所有する自由な個人）と主体たり得ぬ集団的存在（群集）とのラディカルな対置に立脚した 20 世紀の思考の枠組みを根底から組み換えている。これら二つの思考の潮流は，いずれも個体性と集団性の間を揺れ動く多数的存在として集団の行動を分析する。

それゆえ私たちはいま，20 世紀の思考を支配した「群集」の概念が決定的に歴史化した地点に立っていると言えるのではないか。このことは，かつて「群集」という形象に不可避的に纏いついていた「共同体への憧憬」や「非理性への嫌悪」といったパトスを共有することなしに，「群集」の文学的表象を再訪することを可能にしており，新たな仕方でそれらの表象を読み直すチャンスを提供している。

本シンポジウムでは以上の問題意識に基づいて，群集という主題に関わる両大戦間期ドイツ語圏の代表的な文学的・理論的テクスト，具体的には，ヴァイ

マル共和国時代の都市小説，デーブリーンの未来小説，エルンスト・ユンガーとフロイトの論考，ヘルマン・ブロッホの諸作品に現れる群集の表象を議論する。

１．同期と拡散の詩学――ヴァイマル共和国時代の都市小説における群集のイメージ

海老根　剛

本発表では本シンポジウム全体の問題意識を概括的に示したうえで，ヴァイマル共和国時代に書かれた都市小説に登場する登場人物の振舞いを，同期と拡散という観点から考察する。まず各発表が前提する群集の概念，および 20 世紀の群集をめぐる思考を規定した概念布置を明確化し，それが今世紀に生じた集団の行動をめぐる新しいタイプの知によっていかに相対化され，歴史化したのかを確認する。そのうえで本発表では群集表象の分析の一事例として，ヴァイマル共和国時代の都市小説を取り上げ「同期」の観点から考察する。同期とは，動物の群れの振舞いを対象とする自然科学的研究において提出され（Vehlken 2012），パフォーマンス研究において人間の集団的な振舞いの分析のためにアップデートされた概念である（van Eikels 2013）。同期の概念は，諸個人がみずからの行為遂行性を保持したまま，他者や環境と相互作用するなかで，集団性と個人性の間を揺れ動く様を記述することを可能にする。ヴァイマル共和国時代の小説を群集心理学的観点から考察した先行研究（Zeller 2011）で扱われた作品を主に取り上げ，それを同期の観点から分析することで，今世紀に生じた集団の振る舞いをめぐる思考のパラダイムシフトが，文学作品の歴史的な群集表象の考察に対していかなる再読の可能性を開くのかを検討したい。

２．発酵する群れ，発熱するテキスト――A・デーブリーン『山 海 巨人たち』における文学的テルモグラフィー

粂田　　文

未来小説『山 海 巨人たち』（1924, 以下BMG）には，労働者，移民，難民，戦士，動植物，水，炎，氷など，大量の人間や生き物や物質の集まりないし塊が頻出するが，生態学の観点からBMGの「怪物的な塊」（Bultmann 2014）について論じるブルトマンが示唆するように，そこでは個と集団や社会と自然といった近代特有の二項対立がもはや機能しない世界が顔を覗かせる。以上をふまえ，本発表では，作中で度々用いられる「発酵」（gären）という言葉を手掛かりに，拡散と凝集，あるいは増殖を繰り返す様々な「群れ」の表象を分析する。

BMG では，例えば温度や気体を表す語彙が，アモルフな群れの性質やそこに作用するエネルギーを可視化させる。一方，無数の微生物の働きによって有機物が分解され変質する発酵現象とのつながりを指摘する Masse の語源研究（Friedrich 1999）を敷衍すれば，それ自体が解体と生成の場となって変質しつつ環境に接続される群れの動きが浮き彫りになり，統一的主体を持たない相互

作用的な集団のイメージへと思考が開かれる。また，「発酵」というキータームを介することで，有機的なテキストとしての特性も見えてくる。作者が集めた当時の最先端の知が独特の文体により統一的な意味に回収されない単語の群れに分解され変質する。発酵し，発熱するテキストから生成される群れの世界は，「共同体への憧憬」や「非理性への嫌悪」といとは一線を画するものとなろう。

３．第一次世界大戦と「死者たちの群集」表象――戦友意識と戦死者祭祀

古矢　晋一

第一次世界大戦は史上初の「大量死との遭遇」（Mosse 1990）をもたらし，戦間期ドイツにおいて戦死者の祭祀と追悼が喫緊の問題となった。「大量死（Massentod）」とは「大量の死者たち」であり，視点を変えれば戦没兵士によって構成される「死者たちの群集（Masse der Toten）」（Canetti 1960, 1971）の在り方がここで問われていると言えるだろう。本発表は軍隊を集団（Masse）の一例として論じたフロイトの『集団心理学と自我分析』（1921）の読み直しを図りながら，両大戦間期にとりわけ戦死者の追悼という問題に取り組んだエルンスト・ユンガーの編著『忘れえぬ人々』（1928）における戦没兵士との「戦友意識（Kameradschaft）」という点に注目し，戦間期ドイツ語圏における戦死者祭祀の問題を群集の言説として捉え直す。

フロイトの集団理論との関連でユンガーをはじめとする戦争小説に言及した研究（Prümm 1974, Theweleit 1977/78, Zeller 2011）はあるが，本発表は戦死者祭祀をめぐる研究（Linse 1980, Mosse 1990, Koselleck 2023）ならびにユンガーの政治評論を追悼論という観点から翻訳し，解説した研究（川合 2016）を踏まえつつ，さらに戦友意識の変遷を論じたジェンダー史的，軍事史的研究（Kühne 1996, 2006）を参照しながら，ユンガーにおける（生者と戦死者たちとの）戦友意識の理想化された言説の特徴をフロイトの集団理論とともに明らかにする。その際に問題となるのは，戦死者たちがいかなる群集を構成していたのか，そして追悼する生者が「死者たちの群集」とどのような関係を結んでいたのかである。

４．未解決の問いとしての群集――H・ブロッホの群集思想と小説美学

早川　文人

近年，H・ブロッホの群集論は民主主義の後退という問題から注目を集めているが，本発表では，「共同体への憧憬」や「非理性への嫌悪」といったパトスなしに，彼のテクストに展開される群集表象に改めて目を向け，再布置することで，それらの表象が参照する射程の更なる広がりを示したい。公開書簡『街路』（1918）の三千人の歌声，『夢遊の人々』（1930-31）におけるベルリンの風景に溶け込む人々や狭い部屋に密集した労働者たち，『知られざる偉大さ』(1933）での競技場の観客の集団行動，戯曲『贖罪』（1932 成立, 1934 初演）

の意識的に控えられた暴動描写や個から集団に変容する合唱のエピローグ，『ウェルギリウスの死』（1945）の群集パノラマ。これらの群集表象は「革命的群集」（Ebine 2006, 2017）の性格を備えるが，暴発には至らぬ姿勢に特徴がある。また未完の『山の小説』についてブロッホは群集内部の語り手を通して，「客観的描写」では捉えきれない群集機能を把握しようと試みた（Broch 1940 成立）。1936 年に初稿は成立したものの改稿が重ねられた理由の一つは，亡命地アメリカでより積極的に受容された精神分析学が，彼の群集観に輪郭だけでなく（Kiss 2014），群集が孕む「歪んだ癒し（Schiefheilung）」（Freud 1921）や迫害構造を描く課題も与えたからではないか。このようにブロッホにおけるフロイト心理学の影響を顧みつつ，未解決の群集問題との取り組みが彼の思想と創作の礎となり，同時に躓きの石ともなった点を指摘する。

シンポジウム II（14:30～17:30）

B 会場（103 教室）

Die Romantik zwischen Universalpoesie und Gesamtkunstwerk

Moderator: Kanichiro Omiya

In der literarischen Epoche der Romantik versuchen verschiedene Autoren wie Justinus Kerner, E.T.A. Hoffmann, Jean Paul und andere das Schlegel'sche Konzept der romantischen Universalpoesie im Roman umzusetzen. In besonderer Weise gilt das für Medienromane wie Justinus Kerners Reiseschatten. In den Reiseroman wird das Buch als Druckmedium eingefügt, in das wiederum Gedichte eingestreut sind sowie – hier findet ein Medienwechsel in die Optik statt, der mit dem Wechsel der Gattung von der Epik in die Dramatik verbunden ist – ein Schattenspiel, das unter Zuhilfenahme einer laterna magica dramatisch inszeniert werden soll. Die Verbindung verschiedener Medien zu einem Gesamtkunstwerk in Kerners Roman wie in wesentlichen Texten der Romantik verdient eine eingehende medienwissenschaftliche Untersuchung, die sich neben den Gattungs- auch den Medienwechseln widmet.

Die ‚Umsetzung' der im 116. Athenäumsfragment von Friedrich Schlegel theoretisch ausgeführten Idee der Universalpoesie, soweit man überhaupt von einer Vorgängigkeit der Theorie sprechen kann, impliziert aber noch mehr: die Vereinigung der getrennten Gattungen, die Gestaltung einer lebendigen und geselligen Poesie, die Poetisierung des Witzes, die Aufnahme des kunstlosen Gesangs und des wahnsinnigen Sprechens, das Schweben zwischen Dargestelltem und Darstellendem. Aber nicht nur im Roman wird die Idee der Universalpoesie aufgegriffen und umgesetzt. In der Frühromantik übernimmt die Literatur die Funktion, unterschiedliche Wissensbereiche in Form einer ‚Universalpoesie' zusammenzuführen. Romantische Subjektivität ist Resultat des literarischen Einsatzes von Medien, deren Zusammenklang schon auf eine moderne multiple Medienerfahrung vorausweist. Da die Medien sich jedoch aisthetisch selbst neutralisieren, wie es Sybille Krämer formuliert, erzeugen die (v.a. künstlerischen) Medien den Eindruck einer Unmittelbarkeit, durch die erst die sinnliche Wahrnehmung des Subjekts ästhetischen Rang erhält. Zugleich ‚massieren' (Marshall McLuhan) Medien

die Wirklichkeit, geben der Phantasie Raum und drohen das Subjekt der Welt zu entziehen. So verstellen in E.T.A. Hoffmanns „Der Sandmann“ Nathanaels optische Gläser seinen Blick auf die Automate Olimpia. Derart erzeugt der literarische Einsatz von Medien Wissensräume, die zum einen im Dienst des Konzepts der Universalpoesie stehen und zum anderen radikal subjektiv, phantastisch und sinnlich aufgeladen sind.

Die Beiträger dieses Symposiums wollen in ihren Beiträgen diese medieninduzierte Zusammenführung von Wissensbereichen in poetischer Form am Beispiel unterschiedlicher Gattungen untersuchen. Die Vorträge nehmen die literarische Auseinandersetzung mit Medien und Medialitäten und ihrem sympoetischen Potential vor dem Hintergrund von Schlegels Konzept der romantischen Universalpoesie in den Blick.

１．Zum Verhältnis von Poesie, Medien und Wissen bei Novalis

Johannes Waßmer

Am 11. Mai 1798 sendet Novalis fünf kurze Texte an Friedrich Schlegel und bietet sie ihm für das Athenäum an. Alle fünf Texte – später wird ein sechster hinzutreten – bilden, ganz gemäß der frühromantischen Poetik, abgeschlossene Fragmente (Burdorf: Zerbrechlickeit 2021). Sie sind Dialoge überschrieben und in ihnen versammelt Novalis einige der Themen seiner Auseinandersetzung (Enzyklopädie, Physik, Chemie oder Psyche), in denen die frühromantische Theoriebildung bereits ihre Wirkung zeigt. Gleichwohl bezieht Novalis nicht explizit universalpoetische Position. Der "Monolog" stellt vielmehr die sinnliche Präsenz von Sprache ins Zentrum: Novalis ist es um „Applicatur“, „Takt“, „musikalischen Geist“ der Sprache und um „Zunge“ oder „Hand“ des Sprechenden oder Schreibenden zu tun. Und in "Dialoge" wird die Materialität von Schrift prominent diskutiert. Im ersten Dialog tauschen sich die Gesprächspartner über den Gedanken der Enzyklopädie aus und bedienen sich dazu einer Metaphorik des Buch- und Schriftkörpers: Der Katalog der Leipziger Buchmesse ist eine „Last Buchstaben“, Erbauungsschriften stehen „in typographischer Rüstung“, man sei „wie kümmerliches Moos, an den Druckerstock“ angewachsen und sehe daher, womöglich, „nur noch Bücher, aber keine Dinge mehr“. Offenbar bildet Buch in seiner Materialität ein mediales „Vehikel“.

２．Romantische Subjektivität im Werk Justinus Kerners

Takeo Tano

Justinus Kerner (1786–1862) ist ein in Japan weitgehend unbekannter Autor des schwäbischer Dichterkreises. Die Region brachte Dichtergrößen wie Schiller und Hölderlin hervor, deren Spuren im Werk Kerners zu finden sind. Dies spiegelt sich besonders im "Poetischen Almanach" (1812) wider, den Kerner gemeinsam mit Johann Ludwig Uhland (1787-1862) und Gustav Schwab (1792-1850) herausgegeben hatte, sowie im "Deutsche[n] Dichterwald" (1813). Der Vortrag wird sich auf Kerners Gedichte im "Deutschen Dichterwald" (1813) beschränken und die ihnen zugrunde liegende Naturauffassung untersuchen. Die Analyse wird sich auf die Dichotomien in der Naturdarstellung, die Einsamkeit des poetischen Ichs, den Zyklus von Tag und Nacht und dem Bild des Lichts sowie der Vision eines kommenden goldenen Zeitalters konzentrieren, die ihrerseits einen Bezug zum Werk Hölderlins herstellen. Obwohl die

Werke von Hölderlin und Kerner in unterschiedlichen literarischen Gattungen angesiedelt sind, haben sie eine gemeinsame perspektivische Basis. Dies kann einerseits als ein kulturelles Charakteristikum des schwäbischen Raumes angesehen werden, das über die kulturellen Eigenheiten einer deutschen Region hinaus in das 19. und 20. Jahrhundert hineinreicht, andererseits auch als Konstituum einer sich ausbildenden romantischen Subjektivität.

Kerner ist als Dichter in Deutschland und erst recht in Japan nicht ausreichend erforscht worden. Der Vortrag möchte einen Anstoß geben, sich dem Werk dieses unbekannten Dichters verstärkt zuzuwenden.

３． Justinus Kerners „Reiseschatten“ als romantisches Gesamtkunstwerk

Arne Klawitter

Justinus Kerner (1786–1862) ist für die germanistische Literaturwissenschaft immer noch eine Randfigur. Die Forschung zu seinem Werk hat sich bis auf wenige Ausnahmen bislang auf die regionale Wirkungsstätte Kerners beschränkt. Dabei hat der aus Ludwigsburg stammende Dichter und Arzt mit dem "Reiseschatten. Von dem Schattenspieler Luchs" nicht nur das wohl bemerkenswerteste Schattenspiel der deutschen Literatur verfasst, sondern gleichzeitig das Musterbeispiel eines romantischen Romans vorgelegt und, wie im Vortrag gezeigt wird, auf der Grundlage einer epischen Verknüpfung von Schattenspielen nach dem Vorbild romantischer Universalpoesie ein konzeptionelles Gesamtkunstwerk geschaffen.

４． Spiegelung und Blendung. Glasmedien im Werk von E.T.A. Hoffmann

Michael Wetzel

Die Welt E.T.A. Hoffmanns ist bekanntlich das Gegenstück zur frühromantischen von Novalis. Der reine Glanz der blauen Blume wird – wie in eines matt geschliffnen Spiegels dunklem Widerschein – gebrochen und in Gegensatzverhältnissen des Clair-Obscur, der Duplizität, der Zerrissenheit aufgespalten. Und doch sind es die gleichen Ideale und Utopien, die Früh- und Spätromantik teilen: Aber der avantgardistische Enthusiasmus der „Athenaeum“-Autoren wird heimgesucht vom Unheimlichen der Schatten- und Nachtseiten der Natur. An der Inszenierung dieses Effekts in Hoffmanns Erzählungen ist – so die These des Vortrags – maßgeblich ein Medium beteiligt, das in unterschiedlichen Varianten auftaucht: das Glas. Es schaltet sich als Medium mit doppeldeutigen Qualitäten immer wieder in die Blickführung der Protagonisten ein, einerseits als Potenzierung einer unendlichen Spiegelung und andererseits als Störung einer Blendung von Blicken und Augen. Andere Romantiker wie Schubert hatten den Glaskörper zum Ideal einer Vollkommenheit des Bildes vom Erdganzen erhoben und Brentano sieht sogar im Glasmedium mit seiner Annäherung der Welt bei gleichzeitiger Distanz das Medium der Romantik par excellence. Bei Hoffmann erscheint Glas als Universalmedium eines bildlichen, musikalischen und architektonischen Gesamtkunstwerks in allen Varianten als Spiegel, Kristallflasche, Klangkörper, Fensterglas, Perspektiv, Mikroskop, Glashaus, Fernglas etc., wobei besonders die Verarbeitung des Materials durch Schliff und Pressung den medialen Charakter bestimmt, der das menschliche Auge ‚armiert‘, zu übermenschlichen Ein-, Durch- und Über-Blicken befähigt, aber auch täuscht.

Insbesondere ist es das Vergessen des Medialen, die Vorspiegelung einer Unmittelbarkeit des Wahrgenommenen, was die Protagonisten in tiefe Krisen stürzt und die poetische Einsicht einer transzendentalen Wende fordert, die ähnlich wie das Verfahren der „Re-Mediation“ funktioniert, derzufolge das Medium als Medium in der Konstruktion des Wirklichen mitgedacht wird: als das im Dargestellten selbst Mitdarstellende.

口頭発表：文学 I（14:30～17:45）

C 会場（102 教室）

司会：小林　哲也・菅　利恵

１．啓蒙の合流点としての『ドイツ建築について』

今村　　武

1770 年 4 月 4 日に到着したシュトラスブルクで同地の大聖堂に接した折の感動を，ゲーテは『ドイツ建築について』（1773 年）において書き記した。若き詩人は，ドイツ的な内的必然性を表現する壮大なゴシック建築の美を再発見し，その建築家たるシュタインバッハに賛辞を贈る。ゲーテは，不明確・無秩序・不自然といった言葉で説明されていたゴシックの放埒な形態こそ，芸術家の率直な魂の表現であると評価する。

本発表は，次の諸点に言及する。（１）『ドイツ建築について』は，ヨーロッパの啓蒙が様々なルートを通じてドイツにもたらされる中で一つの合流点を形成する。（２）ヘルダーの新たな文学論とヴィーラントの詩的天才のコンセプトが合流し，芸術と芸術家の新たな評価軸が呈示される。（３）シュトラスブルク大聖堂の経験が，自律的創造者たる詩的天才のコンセプト確立への重要な契機を形成する。

疾風怒濤詩学の源流の説明という評価軸から，この建築家讃美を契機とする新たな自律的創造者の概念を説明し，シュトラスブルク大聖堂の受容体験が，シェイクスピアの独創性を基礎とする詩学の成立に続く様相を呈示したい。

後年のゲーテが建築学の分野においても一つの中心点であったにも関わらず，包括的研究が行われなかった状況にも留意しつつ，初期ゲーテのゴシック建築傾倒の影響圏にも言及し，18 世紀ドイツ啓蒙という大枠から当該論考を再評価したい。

２．幻想としての芸術崇拝――ヴァッケンローダーとティーク『芸術を愛するある修道士の心情の吐露』(1797)におけるラファエロの絵画『システィーナの聖母』崇拝について

馬場　浩平

1800 年前後，政治的な革命に失敗したドイツにおいて，単数形の「芸術」（die Kunst）概念は，社会革命を実現するための理想化された共通理念であっ

た。初期ロマン派の嚆矢とされるヴィルヘルム・ハインリッヒ・ヴァッケンローダー（1773-1798）がルートヴィッヒ・ティーク（1773-1853）の編集を通じて上梓した芸術家小説『芸術を愛するある修道士の心情の吐露』（以下，『修道士の心情』）（1797）では，この「芸術」概念が崇拝の対象として記述されている。『修道士の心情』において，古代ギリシア芸術を模範にした啓蒙主義の理念に抗うべく，ルネサンス芸術が称賛されているが，なかでも幻想の登場人物ラファエロの描写は注目に値する。だが，ヴァッケンローダーはドレスデンの美術館にあるラファエロの絵画『システィーナの聖母』（1512/1513）を実際に見ているものの，『修道士の心情』の中で絵画の作品名を明かしてはいない。これは，ラファエロの絵画を物語の中で鏡像的に再構成した独特な手法だといえる。

ここ20年間のドイツ語圏における文学，美学，美術史の分野では，19世紀のドイツにおける宗教文化の一環として「芸術宗教」（Kunst-Religion）の問題が活発に言及されてきたが，『修道士の心情』については「芸術と宗教の融合」を表象する芸術史上の特異な一例として位置づけるのが常であった。

それに対し本発表では，グスタフ・ルネ・ホッケが提唱する「マニエリスム」を手掛かりに，「幻想＝遊戯」という観点から，『修道士の心情』における芸術崇拝を「鏡像的現実」として，再考する試みである。

３．Wider „Ausländerey“ und „Exoteromanie“. Problematisierung und Pathologisierung des Exotismus um 1800

Thomas Schwarz

Der Vortrag bietet eine begriffsgeschichtliche Untersuchung zum Konzept des „Exotismus“ im deutschen Sprachraum in einem Zeitraum zwischen etwa 1770 und 1830. Als Quellen dienen zunächst ein Brief von Herzog Karl August von Weimar an Johann Wolfgang Goethe aus dem Jahr 1795 und Goethes Gespräch mit Johann Peter Eckermann vom 31. Januar 1827, in dem er sich zur „Schätzung des Ausländischen“ bekennt. Dem steht ein Korpus von Texten gegenüber, in dem die „Ausländerey“ verworfen wird. Die Liste der Autoren reicht von Friedrich Gottlieb Klopstock über Johann Gottlieb Fichte zu Friedrich Ludwig Jahn.

Bis heute ist der Exotismus ein umstrittenes Konzept. In der angelsächsischen postkolonialen Forschung gilt er im Anschluss an Edward Said als Ästhetik des Imperialismus. Die von Victor Segalen beeinflusste frankophone Diskussion gesteht einem „radikalen Exotismus“ (Jean Baudrillard) allerdings auch das Potential zu, als Lebenskunst eine Begegnung mit dem Fremden auf Augenhöhe zu befördern.

Die These des Vortrags lautet, dass der Exotismus um 1800 als „Exoteromanie“ mit weitreichenden Konsequenzen pathologisiert worden ist: Die abschätzige Rede von der ‚Ausländerei‘ diente der Mobilisierung antiexotistischer und nationalistischer Energien, die eine allem Fremden feindlich gesonnene Mentalität befördert hat.

４．理想の劇場の創出を目指して――グラッベの作品における喜劇的要素について

児玉　麻美

クリスティアン・ディートリヒ・グラッベ（1801-1836）の劇作品に備わる際立った特徴として，悲喜劇的な分裂性の要素がしばしば指摘される。彼のドラマトゥルギーのもつ「演劇性（Theatralität）」に着目した先行研究は，これが「英雄主義や偉大さ，意味の喪失」という三月前期の時代的特徴をラディカルなやり方で浮き彫りにしたという功績に光を当てている（Maes 2014）。一方，グラッベ作品における喜劇的要素に関しては，苛烈さや過剰さといった側面に注目が集まり，その遊戯性に託された劇場改良の意図についてはこれまで論じられてこなかった。

劇評集『デュッセルドルフの劇場について』（1835）やオペラ台本『シッド』（1835）からは，グラッベがシェイクスピアやゲーテ，シラー，ロマン派等の作品と詩論を踏まえつつ，「冗談」「機知」といった要素の導入による演劇改革を視野に入れていたことが読み取れる。とりわけ後期の劇作品に頻出する独特のユーモアは，喜劇／悲劇といった従来のジャンル区分を超越したところで，観客に舞台上の出来事を注視させ，客観的な判断を促すための重要な仕掛けとして機能している。また，グラッベが歴史劇の作中における諧謔やイロニーを重視したことの背景には，演劇というメディアそのものの作為性に対する自己批判の狙いもあったと考えられる。

５．シュティフターの政治論における「人間社会」概念とその『晩夏』との関連について

杉山　東洋

本発表ではアーダルベルト・シュティフターの著作を対象とし，文学における概念の利用という事柄を論じる。

1848 年の革命直後にシュティフターは次々と政治評論を発表している。そのテキスト群は教育規範への批判的視座や法（Recht）を主題化した点から注目されてきた（Mayer 2001）ものの，近年の研究ではほぼ重要視されていない（Lengauer 2017; Doppler 2019）。しかし，未だに具体的な分析が試みられており（Kohl 2018），検討の余地は多い。

「人間社会（die menschliche Gesellschaft）」の崩壊が時代の第一の悪であると，シュティフターはその政治論の中で繰り返し述べている。革命という事象の暴力的な帰結を否定する作家は，この概念を用いて自身の信条を示すと共に，教会と学校を通じた現状改善の方策を読者に訴える。その中で彼はその他の論説文の主題となる概念も駆使しており，諸概念の連関が彼の政治論からは読み取れる。「人間社会」という概念自体はシュティフター以前にも，また彼の同時代人にも使用されている（Riedel 1975; Wagner 1849）ものの，彼の場合，その概念がのちの創作にも用いられている点が特徴的である。

『晩夏』に関する書簡の中でもシュティフターは，現実の悪に対抗するとい

う意図を明らかにしていた。同作の冒頭，主人公ハインリヒの父は自己本位の生き方が「人間社会」への貢献につながるという理想を述べる。「人間社会」は，作家かつ教育者であったというシュティフター像（磯崎 2021）や「倫理的な書物」という『晩夏』解釈（Kreis 2005）にも沿う重要な概念として捉えられる。

口頭発表：語学（14:30～16:25）

D 会場（101 教室）

司会：金子　哲太・大喜　祐太

１．モダリティ表現の解釈についての一考察――AI 翻訳と人間翻訳の比較を通して

横田　詩織

Searle （1980:3）は「中国語の部屋」の喩えを用い，機械が言語の意味を捉える際には記号の結びつきに基づいて作業を行うのであり，人間がそうするように記号の内容を理解しているわけではないことを示した。この問題は，AI による言語生成や機械翻訳が大きな話題となっている現在においてはますますアクチュアルなものと言えよう。

ニューラルネットワークに基づく AI 翻訳では，共起する語の頻度や分布といった隣接性が数値の形で入力され，その数値を手がかりに異なる言語への翻訳が為される（Poibeau 2020）。語の隣接性を考慮することで，統計や用例に基づくこれまでの機械翻訳以上の精度で翻訳が為されるようになった。しかし，人間翻訳と AI 翻訳の間に生じるギャップは未だ完全には解消されてはいない。本発表では両者の比較を通し，現段階の AI 翻訳には人間の有する言語知識の一部が欠けていることを示す。その中で特に，Fritz（2021）の議論に基づき，モダリティ表現の解釈において，言語知識としての部分－全体関係が果たす役割に注目して議論を行う。

２．接尾辞-ung の分布変化――中世ドイツ語訳ベネティクト戒律に基づいて

黒田　　享

接尾辞*-ung* は現代ドイツ語において*-de*，*-nis*，*-t* などと並んで行為名詞（動詞の行為自体を表す）の形成に使われる。これらに対応する要素（*-ung*，*-ida*，*-nissi*，*-t*）を伴う行為名詞は古高ドイツ語訳ベネティクト戒律（9 世紀始め）でも見られる。このうち*-ida* と*-ung* を伴う名詞はかなり頻度が高い（*antfrâhida*（質問），*gisuohhida*（調査），*ahtunga*（迫害），*îlunga*（性急）など）が，13 世紀・14 世紀の中高ドイツ語訳ベネティクト戒律では行為名詞に伴う要素は主として*-unge* (*-ung*)になる。これは原典の同一箇所の翻訳の比較によっても確認でき，*-ida* が担っていた機能領域が*-unge* によって侵食されたと考えられる。

伝統的なドイツ語語形成研究では，個々の語形成要素の機能的相互関係の変化は中心的に論じられない。本研究では，ベネティクト戒律に基づいた異なる時代のドイツ語テキストを比較調査し，ドイツ語名詞形成接尾辞の機能的相互関係の変化を明らかにする。また，基体動詞の接頭辞の有無により行為名詞の形成可能性が変わる（例えば *nehmen* から**Nehmung* を作ることはできないが，*vernehmen* から *Vernehmung* を作ることはできる）現象（Paul 1920, Demske 2000 など）や小規模コーパスを用いた質的研究の意義も議論したい。

３．相関詞 es の談話上の機能

井坂 ゆかり

目的語としての相関詞 es は，三瓶 （1985）をはじめとする研究で，すでに話し手の意識や談話の中で確定している話題，旧情報との関連が指摘されてきた。一方，主語としての相関詞 es の談話上の役割は，これまであまり注目されてこなかったと言える。

議論の出発点となるのは，2 つの文の関係性を表す動詞において，相関詞 es よりも相関詞 da(r)+前置詞が優先されることである。例：Dass er nur eineinhalb Meter groß war, hinderte Napoleon nicht ?(**daran**), dass er Kaiser von Frankreich wurde. (Breindl 1989: 191)上記例では，主語文が前域を占め，後続の dass 文が前置詞格目的語文であることを明示する相関詞 daran が必須となる。主語文の無標の位置が前域であるならば，主語文が後置される相関詞 es が現れうるケースでは，主語文の内容は後から発話されるべき新情報の可能性が高い。

主語としての相関詞 es は，Pütz (1975)以来，統語論的な分布の特徴から目的語としての相関詞 es との共通点が取り上げられてきた。しかし，談話上の機能に着目すると，主語としての相関詞 es にはむしろ，定性効果と関連があるかどうかが論じられたり（荻原 1993），新たな個体の存在を導入する単独判断の表現として取り上げられたり（Sasse 1987）する，前域を埋める虚辞 es との類似点が見いだせる。

ブース発表 I（14:30～16:00）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

E 会場（206 教室）

時制と情報構造：完了時制と過去時制を対象に

藤縄　康弘

ドイツ語の時制研究は，発話時（S）と事象時（E）に加えて参照時（R）の重要性を説いた Reichenbach (1947) 流の枠組みを採用する限り，完了時制＝《現在完了》（E < R, S），過去時制＝《過去》（R, E < S）というふうに，各時制の形態と機能が一義的に対応する関係を唱えるのが主流である（Ballweg 1988,

Ehrich und Vater 1989，Ehrich 1992，Klein 1999，Thieroff 1994 など）。数少ない例外は Löbner (2002) で，彼は完了時制を二義的と見ているが，過去時制については sein（例：ich **war** *gerade* im Supermarkt）を除いてやはり一義説の立場を取っている。

本発表では，過去数年にわたりドイツ語圏の公共ラジオ放送のニュースや音楽番組から収集した実例をもとに次の 2 点を主張する：

①完了時制と過去時制はともに《現在完了》も《過去》も意味し得る。いずれの時制が最終的にいずれの読みで解釈されるかは，狭義の文法以外の条件，とりわけ語彙的なそれに負うところが大きいとはいえ，どちらの時制も（語用論ではなく）意味論の次元においてすでに二義的と認められる。とりわけ，過去時制の《現在完了》読みが sein だけでなく一般動詞にも可能なこと（例：wir **hörten** *eben* von Ludwig van Beethoven die Sonate Nr. 5 ...）が特筆される。

②完了時制と過去時制の機能的相違は語用論の次元で現れるが，そのうち特に重要なものとして情報構造への対照的な寄与を指摘できる。《現在完了》読みにせよ《過去》読みにせよ，完了時制の文で支配的な情報構造は文法上の主語・述語分節に並行的なもの — つまり Lambrecht (1994) の言う述語焦点や主語焦点 — である。これに対し《現在完了》読みで用いられた過去時制の文では，文焦点や主語以外の項焦点（ibid.）が実現する傾向が顕著である。

ブース発表 II（16:15〜17:45）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

E 会場（206 教室）

「赤新語を行く人は死にに行く人」――ドイツ語＝日本語 E-Mail タンデム学習におけるフィードバックの役割

中川　慎二・渋谷　　歩

タンデムにおける返信は，意識的な学習フィードバックであり，情報提供，適応，インスピレーション，そして修正の機能を発揮しうる（Diehr 2022）。

中川（2013, 2014）では日本語＝ドイツ語タンデム学習のもつ規範性と逸脱について考察した。2023 年春学期に実施した E-Mail による日本語＝ドイツ語タンデム学習から，パートナーとのやり取りに見られるフィードバックの軌跡を分析し，フィードバックによる学びを構築的に検討する。

タンデム学習の初期には対面と E-Mail によるタンデムが考案され，Bochum 大学を中心に発展した。自分の母語が相手の学習目標言語に，自分の学習目標言語が相手の母語となる 2 人のペアが互いに学ぶ学習形態で（Brammerts 2005），規範的役割の母語話者から言語知識を習得することが目的であった。今回は母語話者をモデルとせず，対話的関係の中で社会的行為者である「異文化間話者（Intercultural Speaker）」の養成と異文化間コミュニケーション能力の養成を目的とした。異文化間対話を通して自文化を脱中心化（decentre）し（Byram

1997），さらに学びのあり方を大きく転換する議論（Woodin 2020）の中で，本発表では内容統合型学習と学習フィードバックの機能に焦点化し（Diehr 2022, Reich 2010）た。

フォローアップインタビューを通して，パートナーとのやり取りから学習者は学習言語やランデスクンデへの気づきに至り，E-Mail を用いたタンデム学習における返信/フィードバックが学習者にとって自身の持つ知識を相対化し（再）構成するきっかけを与えていることが具体例から示された。

ポスター発表（13:00～14:30）

（ポスターは期間中を通じて掲出されています）

１F 入口ホール

ドイツ語心態詞を含む発話における発話意図とアクセントおよび音声特徴とのかかわりについて

生駒　美喜

ドイツ語の発話では，批判や反論など聞き手に対する発話意図を表す心態詞が頻繁に用いられる。例えば心態詞 schon を含む発話は「確信」，「留保付肯定」，「反論」の意図を示す。「留保付肯定」と「反論」を示す発話では，心態詞 schon にアクセントが置かれる場合がある。発表者の最近の研究では，心態詞 schon が文末に置かれる「反論」の発話では schon にアクセントが置かれないが，schon の後ろに複数の音節が続く発話では schon にアクセントが置かれる傾向が確認されており，音声的要因が心態詞のアクセントの有無に関わっている可能性がある。

本研究では心態詞 schon および動詞 kommt, ist, hat を含む「反論」の意図を示す発話において，schon の後ろに続く音節数によって心態詞のアクセントの有無に違いが生じるかを調べた。その結果，動詞 ist, hat を含むパターンの文では多くの場合に schon にアクセントが置かれるが，動詞 kommt を含むパターンの文では心態詞ではなく動詞にアクセントが置かれるケースが多かった。さらに知覚実験の結果，心態詞のアクセントの有無に関わらず，アクセント部分が L*+H のアクセントパターンを示す発話がより「反論」として知覚される傾向が明らかになった。本発表では，知覚実験と音響分析の結果を基に，発話意図と心態詞のアクセントの有無および音声特徴がどのように関わっているのか，参加者と議論を深めたい。

第 2 日　10 月 15 日（日）

シンポジウム III（10:00～13:00）

A 会場（104 教室）

カリスマ教師とその弟子たち
戦間期ドイツにおける人文科学の再生と変容

司会：香田　芳樹

本シンポジウムは，自由主義が著しく制限された時代において，大学を中心とした人文科学がどのように抑圧的時代潮流に抵抗したのか，あるいは迎合したのかを，20 世紀初頭から第一次世界大戦を経て，1930 年代にいたるドイツの政情と関連させて考察するものである。「ファシズムと学問」に関する先行研究は数多いが，本シンポジウムでは特に「師と弟子」の人間的関係を基軸にしてこの問題を再考したい。これによって G・スタイナーが『師弟のまじわり』（2003，邦訳 2011）として描出した西洋科学史の伝統を補足できる。

第一次大戦の終結とともに，敗戦国ドイツでも大学が再開するが，近代的総力戦を体験して帰国した若者たちは科学的実証主義に対する懐疑から出発しなければならなかった。彼らの知的渇望を満たす学問として現象学が登場したのは，それが形而上学のように現象の背後に本質を求めるのではなく，意識に現れる「事象そのものへ（Zu den Sachen selbst）」立ち返って，存在のありのままの姿を捉えようとしたからである。人文科学の興隆は「カリスマ」的人気を博した大学教授を生み，コレージュ・ド・フランスのベルクソンの講義に学生のみならず一般聴衆も殺到したことは有名である。ドイツでもフライブルク大学のフッサールとハイデガーのもとに多くの哲学徒が参集し，ベルリン大学ではシュトゥンプフの門下生によってゲシュタルト心理学派が形成された。またゲオルゲを師と仰ぐ知識人グループはこうした大学での思想潮流と連動しながら古典の復興を目指した。しかし 1930 年代のファシズムの台頭とともに，こうした機運は急速に勢いを失い，人間主体の復権を求める生の哲学や宗教的精神主義といった狭隘な全体主義に変質するが，その反面，全体を共生的認識の視点から捉えるゲシュタルト論や集合論へと展開する全く別の動力をも得た。

「師と弟子」という視点が有効なのは，当時敗戦によって指針を失った社会が人文的教養に答えを求めたからである。戦間期は大学教育が社会において主導的な役割を果たそうとした時代であり，この担い手をウェーバーが宗教社会学に援用したカリスマ概念によって再考することは，大学教授が教育現場で果たした功罪を問う意味でも科学史上の重要性をもっている。第一次大戦後のドイツ科学の再興を担ったユダヤ人科学者が同化の過程で自己否定に陥るという奇妙なねじれと，同化を問題視する民族国家主義の台頭の軋轢の中で，師弟関係と学問潮流がどのように変容していったのかを 4 名の論者が検証する。

１．三つのモナド論――第二次大戦前夜の個我と国家の問題について

香田　芳樹

エドムント・フッサールはドイツ現象学を主導した哲学者であるが，同時に大学教授として多くの弟子を指導した。後にヨーロッパ思想史に名を残す多くの俊英たちは，しかしやがて師の「厳密な学」から距離を置き，ある者は主体性の哲学に，ある者は神秘的宗教観に，ある者は文化社会学に，ある者は数学的神秘思想に基軸を移していく。その一人であり，後のマールブルク大学教授ディートリヒ・マーンケ(Dietrich Mahnke 1884-1939)は『新しいモナド論』(1917)で，孤立した個の主観的意識が客観的世界認識と等価であるのは，二つをモナドが架橋するからだと考えた。彼はライプニッツの考えた分割不能な単位を，志向性をもった「意志（Wollen）する原存在（Ursein）」と定義し，これにより世界は数学的理性による「妥当」を越えた，「体験」にもたらされるとした。この思想は，個と世界，主観と客観，自由と神という，戦間期の精神世界を覆った対極的世界観の克服の試みと理解することができる。マーンケに触発されて師のフッサールや同僚のハイデガーがモナド論を展開したことに注目し，第一次大戦を経験した思想家たちが「ドイツ問題」という民族主義的・終末論的問題意識の高まりの中で学問の超越性や歴史性を断念し，個の存在意義を確認しようとする共通の思考へと向ったことをモナド論を手がかりに論じる。

２．自由から義務へ――フッサールとハイデガーの間のハンス・ライナー

馬場　智一

本発表は，現象学における二人のカリスマ教師，フッサールとハイデガーから学んだハンス・ライナー（1896-1991）を論じる。彼は，ハイデガーから影響を受けつつも最終的にはその思想における倫理や責任の副次性を批判し，自由の現象学から義務の倫理学へと向かった。

ライナーは，フッサールの指導下で執筆した博士論文において，意志の自由の問題に現象学的な手法で取り組み，その後は，自由を制限するものとしての義務の研究に向かった。例えば『道徳的拘束の根拠と道徳的善』（1932）や『信の現象』（1937）が挙げられる。

後者は，意志の自由の制限の問題を，宗教的世界観を素材にして分析しており，分析の枠組みを，ハイデガーの講義「哲学入門」（1928-1929）に依拠している。本書後半には，当時のローゼンベルクの『20 世紀の神話』（1930）への言及があるゆえ，ライナーを親ナチ的であるとする性急な評価もある。

しかし，戦後の『義務と好悪』（1951）では，倫理学の軽視などを問題視しハイデガーへの批判が増える。特に良心の分析については，その不十分さが指摘されている。ナチズムへの（批判的なものも含めた）言及には慎重な分析が必要だが，全体としてはレヴィナス，ヨナス，アーレントらと同様に，責任や義務といった事象に関心を寄せていった哲学者であったことを本発表は示したい。

３．「そして，もしこの本が成功しているならば，この本はひとつのゲシュタルトであるだろう」――ムージルの思想と作品における現象学的課題としてのゲシュタルト概念

宮下 みなみ

ムージルはベルリン・フンボルト大学博士課程に在籍中，指導教授シュトゥンプフの統計的実験心理学とは距離を置き，博士論文ではシュトゥンプフの好敵手であったマッハの科学的手法について論じた。とはいえ，実際にムージルの思想形成に大きな影響を与えたのは，マッハの思想そのものというより，物理学的自然観における客観性のあり方を批判するマッハの立場を引き継いだうえで，さらには現象学的手法を積極的に実験心理学に取り入れた，ゲシュタルト心理学であった。シュトゥンプフ門下にあったムージルの学友たちが発展させたゲシュタルト理論について学ぶことでムージルが得た着想は，彼の長編小説『特性のない男』（1930/32）における，「愛の千年王国」という作品の中心コンセプトとも深く関わる「感情心理学」をめぐる一連の章の表現のなかで特に生かされている。ここでは，様々な差異を含む要素が多様な関係性を取り結んでゆくなかで生み出される全体性こそが，人間の世界認識に欠かせないゲシュタルトとして捉えられているが，それはまさに，すべての差異が無効化される全体主義的な全体性とは真逆をゆくものであった。このような観点から，本発表は 20 世紀初頭の人文科学思想がムージルに与えた影響を再考する。

４．ゲシュタルトの誘惑――ゲオルゲ・クライスにおけるドイツ・ユダヤの共生について

稲葉　瑛志

本発表は，シュテファン・ゲオルゲの詩と弟子フリードリヒ・グンドルフの「ゲシュタルト（Gestalt）」論を考察対象として取り上げ，師弟間におけるゲシュタルトイメージの変容とユダヤ性との関係に着目する。このイメージが，「共生」作用を放棄した全体論に変容した理由と意味を，アカデミズム内外のドイツ・ユダヤの知的状況を背景に考察する。

師への帰依と集団の閉鎖性を特徴とするゲオルゲ・クライスは，生の統一的把握を学問の意義として掲げ，直観を通じて，歴史の中に生の規範としての人間の理念，ゲシュタルトを探求した。このイメージは後に，ナチズムに傾倒するメンバーによって，アーリア人種の理想の姿へと歪められる（Rossi 2011）。

ただし，ゲシュタルトイメージがグンドルフのようなユダヤ系のメンバーをも魅了していたという問題については，このイメージの変容過程と精神的同化の問題を関連づけて考察する必要がある。本発表では，ゲオルゲの詩からこのイメージを抽出し，ドイツ人とユダヤ人を結ぶ「共生」作用とその問題性を考察する。その後，偉人のゲシュタルトへの献身を示すことによって全体性に没入し，自らのユダヤ性を抹消しようとするグンドルフのゲシュタルト論を分析する。最後に，ユダヤ系のメンバーにとっての，「ゲシュタルト学」という新しい学問に秘められた主題を提起する。

シンポジウム IV（10:00～13:00）

B 会場（103 教室）

中世文学における婦人の名誉

司会：嶋崎　啓

中世ドイツの宮廷騎士文学において「名誉」は基本的に「高い名声，評判」を意味し，また，その名声を可能にする高い地位や身分，富や収益，華美な生活，立派な振る舞い，英雄的行為なども表した。そのうち文学作品で特に問題となるのは騎士の英雄的行為であり，騎士は名誉を arbeit（苦難）や aventiur（冒険）によって獲得し，また名誉を失わないよう安逸な生活を避けねばならなかった。そのように名誉は騎士の行動を方向づける基準となるものであったが，一方，婦人は騎士のように arbeit や aventiur を行うわけではないので，婦人にとっての名誉とは何かが問われることになる。

本シンポジウムではこの問題を扱うために，第一発表で êre（> Ehre）という語の一般的な意味を明確にした上で，第二発表以下で婦人の名誉とは何かを考察する。

第二発表では，ヴォルフラムの『パルチヴァール』において「名誉」を表す語が騎士と婦人では異なる傾向があることを示した上で，騎士の名誉が能動的行為によって獲得されるのに対し，婦人の名誉は貞淑性のように属性としてあらかじめ備わった受動的性質を持つという違いがあることを述べる。そして，シグーネ，アンチコニーエ，オルゲルーゼという三者の名誉を分析し，典型的な受動的婦人の名誉を表すシグーネと，そこからの逸脱を表すアンチコニーエとオルゲルーゼを論じる。

一般に婦人の名誉がそのように貞淑性に基づくとすれば，不貞はすべて不名誉となるはずである。しかし，結ばれない愛において，結ばれないにもかかわらず愛を保ち続けることは単なる不名誉とは言えないのではないかという疑問も生じる。こうした愛と名誉の相克の問題を扱うのが第三発表と第四発表である。

第三発表ではミンネザングの婦人の名誉を扱う。婦人奉仕を行う騎士の目的は婦人との愛の成就であり，意中の婦人と結ばれることは語り手の男性的魅力や内面的美徳の証であるので，彼の名誉となるように見える。しかし「高きミンネ」は，騎士が婦人と結ばれないにもかかわらず愛しつづけることを名誉とする。本発表では，語り手が女性である「婦人の歌」においても，愛が成就されない苦しみに耐えることが彼女の名誉となることを見る。

第四発表ではゴットフリートの『トリスタンとイゾルデ』におけるイゾルデの名誉の欠損を考察する。イゾルデは，トリスタンが伯父を殺し，自分の宮廷的名誉を欠損させた張本人であることを知る時，彼を殺さず共に旅することを受け入れ，更に不倫の嫌疑によって名誉を失う恐怖・苦しみを共有する。それは受難劇にも似た愛の殉教の物語に近い。彼女は名誉へのこだわりとは裏腹に，その喪失を苦しみ喜ぶ倒錯した感覚を恋人と共有する。第三発表では，外的・社会的名誉とは別のものとして変わらぬ愛が内的・主観的名誉となるが，第四

発表で同じように愛が内的名誉となるのかが問われよう。

１．中高ドイツ語の êre「名誉」の語義について

嶋崎　　啓

中高ドイツ語の êre（> Ehre）はラテン語の honor に対応して「高い地位」や「土地の収益」，「名声」，「敬意」など多様な意味を表すが，中世ドイツ文学において最も一般的な意味は「他者からの高い評価」であった。名誉には宗教的な意味での名誉もあるが，多くの場合は世俗の人間関係によって規定される。「世俗の名誉」よりも「神の名誉」を優先して自らを犠牲にしようとする少女を描いたハルトマンの『哀れなハインリヒ』のよう例はあまり多くない。

具体的に何が名誉となるかは宮廷文化の中である程度決まっていた。しかし，『ニーベルンゲンの歌』の „In disen hôhen êren troumte Kriemhilde …“（このような名誉の中でクリエムヒルトは夢を見た）における「名誉」のように名誉はしばしば具体性に欠ける。同様の曖昧さは tugent（> Tugend 美徳）にも見られ，対外的な「名誉」と個人に内在する「美徳」が表裏の関係にあったと言える。「名誉」は相対的であるため，『ニーベルンゲンの歌』においてクリエムヒルトがエッツェル王と再婚することは兄グンテルの目から見れば名誉であるが，クリエムヒルト本人にとっては不名誉だということも起こる。本発表ではシンポジウム全体の議論の前提として，そのような「名誉」という語の多様性を具体例によって示したい。

２．『パルチヴァール』における「名誉」の諸相

松原　　文

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァール』における騎士と婦人の「名誉」について論じる。「名誉」を意味する語には prîs, werdekeit, êre があり，派生語を含めるといずれも非常に用例が多く，宮廷や宮廷人を賛美する定型的な表現が目立つ。ただし次のような傾向が見られる。êre は武勇を通して獲得される騎士の名誉に対して多用される。婦人に対しては êre の使用は限られ，prîs が多い。また獲得するものではなく属性である。本発表では婦人の êre が言及された 3 つの例を検討する。

一人目は，恋人を失う婦人の苦悩（wîplîch(er) sorge(n)）を象徴的に現すシグーネである。彼女の貞淑性は，夫の死の直後に再婚する『イーヴァイン』のラウディーネと比較され称賛される。二人目は，初対面のガーヴァーンにミンネを与えようとするアンチコニーエである。婦人の名誉（wîplich êre）は買えるものだと表現され，宮廷の規範を外れたこの喜劇的な物語を特徴づけている。三人目は，ガーヴァーンの恋人オルゲルーゼである。彼女の高慢な要求に応え続けたガーヴァーンは，最後に婦人の名誉（wîplîch êre）をもって自分のミンネに応えるよう求める。礼儀を心得た宮廷女性の受動性とは一線を画した婦人像である。ヴォルフラムは騎士と婦人の「名誉」について固定的な認識を前提としつ

つも，その枠内に存在し得ないリアルな婦人像も表現し，語の選択によってそれを際立たせている。

３．ミンネザングにおける婦人の名誉――「婦人の歌」を中心に

伊藤　亮平

本発表では，ミンネザングで語られる婦人の名誉について，「婦人の歌」(Frauenlieder)を始めとした婦人の台詞を中心に考察する。

本来，意中の婦人と結ばれることは男性の騎士的魅力や内面の素晴らしさの証左であり，騎士の名誉といえる。しかしミンネザングの主要テーマである「高きミンネ」においては，婦人と結ばれないことが騎士の名誉をもたらす。愛の苦しみに耐え続けるという被虐的態度が，騎士の誠実さや我慢強さといった内面的美徳の象徴として称揚される。

「婦人の歌」では，騎士を慕う婦人の心情が描かれる一方，愛が成就されないことの苦しみも語られる。ラインマルのリートでは，婦人は「心から好意を寄せている」(MF178,1 第 2 節 5 行目)にも拘らず，騎士の求愛を拒む。その理由として，「私の名誉(êre)のため」(MF186,19 第 1 節 10 行目)と述べる。騎士との愛の成就は，婦人の貞節さを揺るがせることになり，婦人にとって不名誉である。婦人は名誉を守るため，騎士の求愛を受け入れられずに，己の心情と名誉との間を煩悶する(Kasten,1995)。しかし婦人は騎士を愛しながらも，己の名誉のために彼の求愛を拒み続けて苦しむという被虐的態度により，これまでの社会的名誉を守りつつ，一途さ・誠実さを持つ婦人としての名誉をさらに高める。謂わばミンネザングでは，男女ともに愛に苦しむことが実質的な男女の名誉であった。

４．イゾルデの名誉と愛――トリスタンの刀の欠損部分の意味

渡邉　徳明

イゾルデはトリスタンの刀の刃こぼれを見つけ，彼が仇敵でありながら彼女の手当を受けていたことを知る。名誉の欠損を埋め合わせるには彼を殺すべきだが，彼女はマルケ王の妃となる宮廷社会の名誉を選ぶ。しかし，それは王の甥トリスタンと共に生きる「不名誉」を意味する。「元の刀の完全な姿＝名誉が失われる前のかつての日々」というイメージの重なりは，半ば幻影としてイゾルデの名誉の欠損を想起させる。刃こぼれが破片と一致して，彼女が彼に刀を振り上げた場面が物語の転回点である。（媚薬は彼らの愛の全ての原因ではない。Barandun, 2009）そして，全的イメージの欠損，傷の不可逆性こそが愛を高める。彼らの愛は全的なイデアを志向する古代ギリシャ的・プラトン的なものではなく，消えない傷と共に生きる中世キリスト教的なものである。二人は苦しみを共有するからこそ愛する。ただし，二人の苦しみが名誉の欠損によると考えた Maurer に対し，De Boor や Ranke の考えた愛はもっと深奥にあって，社会的名誉のような表層的レベルとは別の，内奥の苦しみを伴う。中世におい

ては，罪を負った人々の神への自発的な信仰・宗教意識が精神活動の中心にあり，13 世紀初頭の宮廷風恋愛の苦しみの共有(Mitleiden)も，キリストの受難への共感(Compassio)と重なる(Mertens Fleury, 2006)。

口頭発表：文学 II，文化・社会（10:00～12:35）

C 会場（102 教室）

司会：児玉　麻美・須藤　秀平

１．フランツ・カフカ『訴訟』と第一次世界大戦

藤田　隼風

実はカフカ研究で大戦についての議論が本格化したのは最近のことである。過去の多くの研究は大戦に対する彼の態度を性急に無関心と結論付けた。本人が大戦へのコメントをほとんど残していないからである。

ところが近年カフカ研究は大きな転回を見せている。2012 年には大戦の特集が刊行され，2014 年には大戦をテーマとした単著が出版されるに至った。とはいえ現時点で研究は発展途上にある。

中でも『訴訟』は研究の未成熟を示す好例である。当作品の執筆開始が開戦直後の 1914 年 8 月にあたり，作者と戦争のファーストコンタクトを証言する重要性を考慮すれば，尚更である。現在『訴訟』と大戦の関連を論じた研究者はわずか二人に限られており，相反する見解を提示した両者の議論は未だ決着を見ていない。その争点は極めて初歩的でありながら最も核心的な以下の二つに集約されると言って良い。1) 大戦は作品の成立に影響を与えたのか否か。2) 大戦という文脈の下，作中の裁判所は一体何であるのか。本発表は，当の二点に対する回答として以下のテーゼを提出する。

1)『訴訟』は大戦による影響の産物である。
2) 裁判所のモデルは，WW1 当時のオーストリア軍事裁判所である。

証明はカフカが習慣的に購読していた新聞 Bohemia, Prager Tagblatt の記事を根拠として行う。結果，影響の有無に関する議論には決着が着き，「夢のような内面世界」，「WW2 におけるナチズムの予言」といった『訴訟』解釈の伝統は見直しを迫られることになるだろう。

２．分裂する人称と精神の危機――フランツ・カフカ『巣穴』

山下　大輔

フランツ・カフカ（1883－1924）の晩年の動物物語「巣穴」では，語り手である「私」が自らが造り上げた巣穴について語る。語り手は ich 視点による内

的独白を行うが，2 つの場面においてこの語りの視点が man に転換される。これは語り手の精神的な危機の表れである。つまり，語る内容を自らに属するものとして「私」の名のもとに引き受けることが不可能となったときに，いわば肩代わりする機能を担うものとして man 視点による語りがあらわれるのである。また，突然の man 視点への転換は読者に語り手の混乱を追体験させる仕組みともなっている。

先行研究においても，語りの仕組みに関する議論がおこなわれてきた。しかしながら，その多くは H.ヘーネルの研究（1972）に代表されるように専ら時間論的な観点に着目している。また，語りの視点について考察がされる場合も，そこでは F.バイスナーが指摘した，語りの単一性（Einsinnigkeit）の議論を下敷きにし，語り手の視点が単一であるが故に，彼の認識が巣穴同様に迷宮化し，挫折すると指摘するにとどまっている。しかしながら，この認識の挫折という問題は，語り手がむしろ，語りの視点を「私」に統一できていないことによって一層際立っているのである。この意味において，本発表はこれまで指摘されてきた「巣穴」における語りの視点の限定性という問題に対して，語りの人称の分裂という観点から補足すると同時に，カフカ作品における語りの視点の統一，という議論に新たな角度から光を当てることを試みるものである。

３．トラークルの『夢の中のセバスティアン』詩集の成立過程に見える「妹の連作」

保坂　直之

第1詩集刊行（1913）後，トラークルは即座に第2詩集の制作を始めたが，詩の配列を決める最終工程は容易ではなかった。1914年1月頃は友人の意見を聞き案を練っていたが，3月6日にレック案を黙殺してハインリヒ案による3部構成の『夢の中のセバスティアン』（1915）の原稿を出版社に送り，ベルリンに向かった。死産した妹を見舞って戻った4月以降に3部構成を4つの連作と1つの散文詩からなる5部構成に改め，トラークル自身の構成意図を反映した詩集を完成させた。

Szklenar（1966），Zwerschina（1990）がこの経緯を詳細に論じてレック編選集（1917）を批判したが，編集作業でトラークルが何を目指したのかは不問のままである。

手がかりは，第3連作「死の七つの歌」が1914年1月以降の構成決めの時期に「妹」をキーワードとして際立たせる改変を受けたことにある。Csúri（2016）は第3連作を「月の連作」と言うが，トラークルはむしろ「妹の連作」として形を整えた後ベルリンで妹に会い，チロルに戻ると「妹」と重なる娼婦や聖女を柱に据えて第2連作を独立させて「妹の連作」に繋ぎ，一方で第4連作ではベルリン滞在後の新しい詩への置き換えを進め，妹モチーフを閉じた後の出口を暗に示した。

一連の作業を見ると，第 2 詩集は妹との恋愛問題を中心に据え，その出口を暗示するよう全体が構成されたと考えられる。

４．戦後ドイツにおける「理念の喪失」とホロコースト否定論

渡辺　将尚

1973年に，ドイツ人ティース・クリストファーゼン（1918-97）が『アウシュヴィッツの嘘』を出版して大きな批判を浴びるまで，ホロコースト否定論の中心はアメリカとフランスであった。しかしクリストファーゼンに触発される形で，その後ドイツでも数々の否定論が主張されていくこととなる。ではなぜこの時期だったのか。既存の研究においては，60 年代の出来事を手がかりに，アイヒマン裁判およびアウシュヴィッツ裁判によって，ナチズムの思想や反ユダヤ主義を大っぴらに表明することができなくなった（が，否定論こそ，形を変えた反ユダヤ主義である），あるいは学生運動で子世代から糾弾された結果，自己防衛に出せざる得なくなった，などの説明が試みられてきた。たしかに 70 年代に起こった事象の原因を，先行する時代に求めるのは，極めて妥当であると思われる。しかしその一方で，上記の解釈だけでは説明のできない要素がある。クリストファーゼンからは，もはや反ユダヤ主義の片鱗をも見出すことができないし，本発表の後半で取り上げるマンフレート・レーダー（1929-2014）からは，子世代への自己防衛的姿勢を一切読み取ることはできない。70 年代ドイツの否定論出現の背景には，さらに別の要因が考慮されなければならないのである。

本発表で提起したい新たな要因は，「理念の喪失」である。つまり，ナチズムの理念を共有しているわけでも，ナチズムの思想に完全に同化しているわけでもなく，否定論者たちにはただナチズムのもとに実行された行動・事実，あるいは主張された思想の個々の要素があるだけだということである。ホロコースト否定論は，個々の要素がいわば「データベース化」し，自らの描きたい物語に従って自由に再構成できるようになった状態から生じたのではないか。

口頭発表：ドイツ語教育（**10:00～11:55**）

D 会場（**101** 教室）

司会：田原　憲和・吉村　淳一

１．**Schulentwicklungsprojekt „Deutschförderung Plus“ – langfristigewissenschaftliche Begleitung einer integrierten Deutschförderung an einer deutschen Auslandsschule**

Nina Kanematsu / Diana Beier-Taguchi

Unsere Arbeitsgruppe hat es sich zum Ziel gesetzt, die integrierte Deutschförderung in den 5. und 6. Klassen der Deutschen Schule Tokyo Yokohama (DSTY) wissenschaftlich zu begleiten und zu evaluieren, die DSTY bei der Diagnostik zu unterstützen sowie die Schülerinnen und Schüler (SuS) individuell zu fördern.

Eine Möglichkeit, Entwicklungspotentiale der SuS zu identifizieren, bieten uns die schriftlichen Produkte. Wir analysieren Texte unterschiedlicher Textsorten auf Stärken

und Schwächen mithilfe eines selbstentwickelten Kriterienrasters, das sich u. a. am Schreibkompetenzmodell von Baurmann/Pohl orientiert. Darauf aufbauend geben wir Hinweise zu geeigneten Fördermaßnahmen an die Lehrkräfte, SuS und Eltern weiter.

Einen weiteren Zugang, um die integrierte Deutschförderung einzuschätzen, bieten Interviews mit den Lehrkräften. So können sowohl Informationen zu sprachsensiblen Methoden als auch die Einstellungen der Lehrkräfte erfasst werden.

In unserer Präsentation stellen wir zunächst die Sprachprofile der SuS vor, um Einblicke in ihren sprachlichen Hintergrund zu gewähren. Ein weiterer Schwerpunkt unserer Präsentation liegt auf der Entwicklung von C-Tests für die Klassenstufen 2 bis 5 zur Unterstützung bei der Sprachstandserhebung. Ein zusätzlicher Teil behandelt unsere Planung der Interviews mit den Lehrenden der DSTY, die im Herbst/Winter 2023 durchgeführt werden sollen. Schließlich wollen wir unsere ersten Erkenntnisse bezüglich der Schreibkompetenz der SuS präsentieren und kritisch hinterfragen.

Baumbach, Stefan (2023): Forschendes Lernen in Schul-Universitätspartnerschaften am Beispiel des Projekts FLinKUS. *KONTEXTE: Internationales Journal Zur Professionalisierung in Deutsch Als Fremdsprache*, (1), 172–192.

Baurmann, Jürgen; Pohl, Thorsten (2009): Schreiben. Texte verfassen. In: Bremerich-Vos, Albert; Granzer, Dietlinde; Behrens, Ulrike; Köller, Olaf (Hrsg.): *Bildungsstandards für die Grundschule. Deutsch konkret.* Berlin: Cornelsen Scriptor, 75-103.

Beier-Taguchi, Diana / Kanematsu, Nina (2022): Entwicklungsverläufe der Schreibkompetenz am Beispiel Lernender mit mehrsprachigem Hintergrund an einer deutschen Auslandsschule in Japan. In: *DaF und DaZ im Zeichen von Innovation und Tradition. 47. Jahrestagung des Fachverbandes Deutsch als Fremd- und Zweitsprache an der Philipps-Universität Marburg 2020*, 9-31.

Beier-Taguchi, Diana / Kanematsu, Nina (2023): Schulentwicklungsprojekt „Deutschförderung Plus“ – langfristige wissenschaftliche Begleitung einer deutschen Auslandsschule. In: *Doitsugo Kyoiku (Deutschunterricht in Japan)* 27, 91-105.

２．ドイツ語学習者の発話における「非流暢性」を考える

星井　牧子

学習者の発話における言いなおしや言いよどみは「非流暢性」を示し，学習の初期段階を示す克服すべき現象として捉えられることが多い。学習・教育場面では「流暢さ」が目標とされ，L2 の流暢性研究でも，発話スピードやポーズ，修復の頻度などが測られている。一方，認知的アプローチに基づく第二言語習得研究では，言いなおしや言いよどみは学習者が発話の産出時に行うモニタリングや仮説検証の現れとされ，コミュニケーションの観点からは，学習者が用いるコミュニケーション・ストラテジーのひとつと考えられている。また社会文化的理論では，他者との協働による発話構築プロセスそのものを学習と捉えるなど，学習者の発話における「非流暢性」の位置づけは研究の視点により大きく異なる。

本発表では，「2 種類の非流ちょう性」（定延 2019）や母語話者の発話が「流暢に非流暢（fluently disfluent）」（Belz et al. 2017）であるといった先行研究の指摘を踏まえ，学習者の発話における非流暢性を示す現象を文法知識の意識的な使用と発話の協働構築の 2 つの観点から考察する。発表では，インタビュー場面と多人数コミュニケーション場面のデータを用い，日本語を母語とするドイツ語学習者の発話を分析する。分析結果をもとに，学習者の発話における非流暢性の機能を再考し，ドイツ語教育における学習目標としての流暢性と学習者の発話にみられる非流暢性の位置づけについて議論したい。

３．日本におけるドイツ語学習者の Willingness to Communicate と諸影響要因との関係性の変化

山田　真実

本発表では，ドイツ語を学ぶ大学生のドイツ語での Willingness to Communicate（以下，WTC）と諸影響要因との関係性が，学習の進展とともにどのように変容するのかを報告する。

WTC は，「自ら進んでコミュニケーションを開始する傾向」（八島，2019）と定義され，第一言語でのコミュニケーション研究を背景として誕生した概念である。1990年代以降，WTCの概念は動機づけ研究の一潮流として第二言語習得研究に導入され，学習者の目標言語でのコミュニケーション意欲には，いかなる要因が影響を与えているのかについて調査がなされてきた。本研究では，従来の WTC 研究における理論及び日本のドイツ語学習者を対象とした先行調査に基づいて構築した L2-WTC 仮説因果モデルを縦断的に検証することにより，学習の進展に伴うドイツ語学習者 L2-WTC と諸影響要因との関係性の変化について明らかにすることを目指した。

本研究では，2020 年度の秋学期の開始時と終了時に，ドイツ語を学ぶ大学生を対象とした質問紙調査を実施し，これの結果に基づき，L2-WTC と諸影響要因との仮説因果モデルを構造方程式モデリングを用いて検証した。検証の結果，学期開始時から終了時にかけての L2-WTC と諸影響要因との変化として，「授業に対する認知」から L2-WTC への有意なパスが消失し，学習コンテクストであるドイツ語授業が L2-WTC に直接的に及ぼす影響が相対的に弱まることがわかった。また，学期開始時には検出されなかった，「ドイツ語学習の理由」から L2-WTC への直接効果が学期終了時にはあらたに有意になり，とりわけ「異文化と言語への憧れと興味」という学習理由が L2-WTC に作用するようになることが示された。